

日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA



第198回定期演奏会
The 198th Regular Concert

～日本音楽集団創立45周年記念シリーズ～

日本音楽集団で育った

二十絃箏の過去と未来

40年

企画・構成：吉村七重



2010年

1月23日[土]

午後5時開演
(4時30分開場)

津田ホール



主催：特定非営利活動法人日本音楽集団
助成：平成21年度文化芸術振興費補助金（芸術創造活動特別推進事業）

■ 日本音楽集団：<http://www.promusica.or.jp/> E-mail：office@promusica.or.jp



1、タクシーム 1982年 西村朗作曲

TAQSIM

[二十絃箏独奏] 田村法子

タクシームはアラビア音楽における即興演奏の意で、カーヌーンやウードといった楽器により、奏者は基本となる旋法を用いて、自由に曲想をつづってゆく。この曲も即興的性格を持っており、又アラビア音楽を思わせる旋法を用いていることもあって、思い切って「タクシーム」と名づけた。豊穣な響きを秘めて静止する二十絃箏のゆるやかに弧を描いて張られた絃の連なりは、あたかも澄み渡った湖面のようであり、様々な情感が風となって吹き来たり、その湖面を波立たせて通りすぎる一そういうイメージを抱きつつ書きつづった。

〈西村朗〉

◆委嘱初演：吉村七重

2、青の島 1989年 新実徳英作曲

Oh-No-Shima

[二十絃箏] I 宮越圭子 II 山田明美

「青の島」とは沖縄諸島でのいわゆる「ニライカナイ」（南方の楽園の島思想）にも通じる言葉。この曲では琉球旋法を核とし、二十絃箏の様々な奏法—爪をはずした指によるトレモロ、PPのピチカート、絃の押し放しや突きいろによりピッチを単に変化させる、などを駆使し、それらが2面の二十絃箏の間に作り出す微妙な音程・音色・リズムのずれにより、「南の青」にも通じる暖かみと活力のある音空間を作り出す。

〈新実徳英〉

◆委嘱初演：吉村七重・内藤洋子

3、七段遠音 1992年 柴田南雄作曲

Shichidan-Tone

[二十絃箏独奏] 早川智子

7つの部分からなる変奏曲だが、主題は最後の第七部で弾かれ、または同時に歌われる、岩手県の子守唄である。調絃法は特殊に作られており、低音部は間隔が広く、高音部は狭い。〈柴田南雄〉

◆委嘱初演：吉村七重

4、夢あわせ夢たがえ 邦楽アンサンブル版 1998/1999年吉松隆作曲

Within dreams, without dreams ~ For the 20-stringed Koto and Japanese instruments ~

[二十絃箏独奏] 桜井智永

[十七絃] 城ヶ崎美保 [十三絃] 彦坂恵美

[笛] 竹井誠 [尺八] I 加藤秀和 II 渡辺淳 [打楽器] 盧慶順

[笙] 三浦礼美(客演)

二十絃箏を核にした(水・木・火・雲・空)という五つの夢の「夢の解題」。

タイトルの「夢あわせ」は、見た夢が吉か凶かを解説すること、そして「夢たがえ」は、夢が凶夢だったとき夢あわせで吉夢に変えること。

1998年春、吉村七重さんとウィーン・ゾリステン・アンサンブルのために作曲。99年夏、二十絃箏と7人の邦楽アンサンブル版として再編。

〈吉松隆〉

◆委嘱初演：第156回日本音楽集団定期演奏会 二十絃箏誕生30年

1、天如 1992年 三木稔作曲

Tennyo

[二十絃箏独奏] 山田明美

二十絃箏のための記念すべき最初の独奏曲です。箏の伝統的表現法や、尺八本曲的な要素など、深く日本に基本をおきながら、激しく緊迫したアレグロを持ち、全体として極めてアポロ的であり動く彫塑の趣を持つといわれています。

◆委嘱初演:野坂恵子

2、華やぎ 箏譚詩集第二集<春>より 1976年 三木稔作曲

Hanayagi

[二十絃箏独奏] 田村法子

「箏譚詩集第二集は覚えやすいメロディーやリズムといった、人が素朴に対応できる範囲を決して超えないように心がけた作品で、細かい内容については何も解説を加える必要がない。素直に各タイトルを受け取ってくださればよい。」と、作曲者は初演のプログラムに書いておられます。

しかし、平易な内容とはうらはらに、箏の歴史に新たな流れと演奏技術の革新をもたらした二十絃箏初期の名作です。

◆委嘱初演:野坂恵子

3、樹冠 1989年 長澤勝俊作曲

Jukan[二十絃箏I] 三宅礼子 [二十絃箏II] 久本桂子 [十七絃] 丸岡映美
[尺八] 元永拓

「樹冠」とは木々の枝や葉の茂っている部分のことで、作曲者の好きな言葉である。それぞれの楽器の個性の対峙、尺八と箏群のそれ、そしてアンサンブルへ。木々の葉がひとつであり、かつ多であるように各楽器の響きが際立ち絡み合い、ある調和の世界を形成している。 〈長澤勝俊〉

この作品は後に十三絃箏版も作られ多くの演奏者に愛され、演奏されています。

◆委嘱初演:4つの個による<楽>三橋貴風・吉村七重・宮越圭子・大嶽和久

4、秋の曲 ~尺八と二十絃箏のための~ 1980年 三木稔作曲

Prologue / Autumn Fantasy

[二十絃箏] 熊沢栄利子 [尺八] 米澤浩

日本楽器のみずみずしい序情性にあふれ、美しいメロディーを持つ尺八と二十絃箏のための二重奏曲。哀しくも美しい第3の季節「秋」に触発されて作曲された。

全体は2章に分かれ、〈序章〉は2つの楽器の対話で進められるParlando rubate。主部に当たる〈秋のファンタジー〉はテンポが速くなり、両楽器に下降音形が特徴的に現れるTempo giustoの間に、雅びでゆるやかな部分がはさまれている。 〈三木 稔〉

◆委嘱初演:坂田誠山・野坂恵子

1、箏歌・蕪村五句 2008年湯浅譲二作曲

Koto Uta Buson's Five Haiku

〔二十絃箏独奏〕吉村七重

この曲は、もともと日本音楽集団の委嘱作品として2005年に邦楽アンサンブルのために書かれ、更に、2007年ミュージック・フロム・ジャパンの委嘱による、洋楽器の室内アンサンブル、のためにリコンポーザされたが、当初から吉村七重さんの箏歌を想定していたので、2008年ようやく、二十絃箏と歌と言う、伝統的な「箏歌」、と言う形に再作曲したものである。

芭蕉には禅的なストイックな態度が句の根底にあるものが多いが、蕪村の句には、一種近代的ポエティックな趣が支配的と私には思える。蕪村は蕉風の最も正統な後継者とされてはいるが、蕪村には彼独特の世界があると私は思う。この五句の選句の中に私のそうした考えが反映をされている。

句は、冬、春、夏、秋の順に配置されており、最後に辞世の句が置かれている。 〈湯浅譲二〉

◆委嘱初演：吉村七重

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 一 鴛鴦に 美をつくしてや 冬木立 | 四 狐火の 燃えつくばかり 枯尾花 |
| 二 菜の花や 月は東に 日は西に | 五 白梅に 明るる夜ばかりと なりにけり |
| 三 狩衣の 袖の裏はう 螢かな | |

2、啓蟄の音 ～二十絃箏ソロと四面の箏のための～(委嘱初演) 2010年夏田昌和作曲

〔二十絃箏独奏〕吉村七重

〔十三絃箏〕田村法子 久本桂子 彦坂恵美 丸岡映美

〔指揮〕田村文生

ここ数年「旋律と伴奏」という17世紀から19世紀に至る西洋音楽をはじめ様々な民族音楽においてもしばしば見られる伝統的な構造を敢えて用いつつ、微分音程や精妙なりズム表現によって新しくかつ調和的に響く音楽世界を構築することを試みてきた。邦楽器を用いた初めての作品であるこの「啓蟄の音」もその延長線上に位置する。コンチェルトのようにもみえる編成をもつこの作品において、しかし旋律と伴奏部はそれぞれソロとアンサンブルへとその役目が振り分けられる訳ではない。二十絃箏のソロは旋律と伴奏部の二つを自身に併せ持ち、一方十三絃箏四面によるアンサンブルは左右2群に分かれてソロの各パートを補強する。いわばこのアンサンブルは、ソロ・パートを拡大投影するかのような役割を負っているが、その調律はソロに比べて2段階に少しずつずらされており、唸りを生じさせて音に厚みを与える効果も期待されている。倍音組織を基にした同系列の作品とは異なり、この作品においては旋律は3/4音と7/4音の交代による、また伴奏部は5/4音の堆積による2種の非オクターブ旋法によっており、両者は1音おきに共通音を有している。楽曲形式は非常にシンプルなものであり、3フレーズからなり非拍節的な旋律(A)を時間と空間を徐々に拡大しながら3回繰り返す前半部と、やはり相似の3フレーズより成る旋律(B)を一転して拍節的なリズムによって3回繰り返すやや短めの後半部、そして冒頭の回想としての簡潔なコーダより成っている。

〈夏田昌和〉

3、糸の書 ～二十絃箏と邦楽器合奏の為の協奏曲～(委嘱初演) 2010年松尾祐孝作曲

〔二十絃箏独奏〕宮越圭子

〔箏I〕熊沢栄利子 早川智子 〔箏II〕桜井智永 久本桂子 〔十七絃〕大島菜穂子 城ヶ崎美保

〔笛〕西川浩平 〔尺八I〕米澤浩 元永拓 〔尺八II〕水川寿也 渡辺淳 〔琵琶〕田原順子

〔三味線〕杵家七三 〔打楽器〕望月太喜之丞

〔指揮〕稲田康

私は、独自性と普遍性を兼ね備えた逞しい伝統楽器を多数持ち合わせている文化を有する日本に生まれ落ち、作曲家として現代社会に生きていることに、大いなる喜びと幸運を感じている。

この「糸の書」は、二十絃箏の誕生40周年に寄せて祝意を込めて作曲したもので、二十絃箏独奏が、この楽器の持つ幅広い表現力を縦横無尽に発揮しながら、個性豊かな楽器の集合体である邦楽器合奏との対照や融合の下に糸の紡ぐ空間の書を描いていくような趣の、厳粛な時空の生成を意図している。尚この3月には、姉妹作と言える「PHONOSPHEREⅣ～二十絃箏と管弦楽の為に」の初演も予定されている。二十絃箏誕生40年、おめでとうございます。 〈松尾祐孝〉

ご挨拶

本日はお忙しい中、お出かけくださりましてありがとうございます。
長い演奏会となりますが、二十絃箏40年の歴史の中日本音楽集団で育った演奏者、そして二十絃箏の未来を感じてお聴きいただければありがたく存じます。

まず1部でお聴きいただきますのは、二十絃箏のための作曲としては第2期と思われる時代の作品です。1982～1992の10年間になります。柴田南雄氏を除いては、それまで邦楽器に関わることの少なかった作曲家の方々の、自由なアプローチが伺えると思います。

2部では二十絃箏初期の1969～1980の作品をご紹介します。そして、これらは二十絃箏のための作品中一番親しまれ、演奏されている作品といえるでしょう。

特に三木稔氏は二十絃箏の創成に深く関わられています。プロデューサーとしてこの新しい箏を世の中に紹介していくに当たり、シリアスな作品群と、平易なメロディーを持つ作品群、の2つの要素を意識的に書き分けてられました。

そしてその後二十絃箏は数多くの作品を、多くの作曲家によって与えられ活躍の場を大きく広げてまいりました。

3部は、プログラム中唯一の歌を伴う作品湯浅譲二氏「箏歌・蕪村五句」そして夏田昌和氏、松尾祐孝氏の新作をお聴きいただきます。

これからも二十絃箏は様々なシーンで活躍し、長い年月の歴史を刻む事となると存じますが、どうぞ末永くご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

吉村七重

二十絃箏が固有名から解き放たれる日 音楽学 桐朋学園大学准教授 沼野雄司

16世紀の半ばに3弦から4弦へと発展したヴァイオリン、そして5オクターヴに満たない音域から始まり19世紀の半ばには88鍵へと拡がったピアノは、歴史上のある地点でそのサイズがひとつに収斂した楽器である(5弦ヴァイオリンや8オクターヴのピアノもあるが、あくまでも例外だ)。こうした「最適化」は、身体的な制約、楽器の工学的要請、そして演奏作品の音楽様式などが複雑に絡み合って起こる。

奈良時代以降、長い間にわたって十三絃が標準だった箏は、近代に入ってから目まぐるしく音域の拡大が行なわれることになった。この場合、突如として日本人の身体が巨大化したり、楽器の材質が変わったわけではないから、何よりも演奏レパートリーの変化が楽器の変化を促したと考えられる。宮城道雄の八十絃はその極端な例だが、様々な試行錯誤の末に、十七絃と並んで完全に定着しつつあるのが、野坂恵子が三木稔の協力を得て開発した二十絃箏である。

4枚組のレコード「野坂恵子・三木稔 二十絃箏の世界」(カメラータ、1979年)は、初期の彼らの共同作業の結晶だろう。気迫のこもった演奏はもちろんのこと、このレコードの解説書には、この楽器が世に出るまでの過程が克明に記されており、一種の感動を与えるドキュメントにもなっている。他の作曲家への委嘱もなされているとはいえ、この時代の二十絃箏が、野坂と三木という二つの名前と強く結びついていたことは間違いない。

一方、開拓者の野坂の意思を継ぎながらも、この楽器をさらに広い世界に船出させたのが、吉村七重だった。1988年にリサイタルを開始して以来、吉村は日本のほとんどの主要作曲家たちに新作を委嘱してきた。彼女の功績は、二十絃箏作品を「現代邦楽」というジャンルの外に連れ出した点にあらう。実際、日本の現代作曲家の作品リストには、ことごとく二十絃箏のための曲が入っているわけで、やや大げさにいうならば、今や二十絃箏はアコーディオンと同じく「ちょっと変わった楽器」にすぎない。もっとも、その圧倒的な委嘱活動によって、それらの作品に吉村七重という名前が消し難く刻印されていることも、また事実ではある。

二十絃箏が本当の意味で新しい楽器として認知されるためには、おそらく、こうした固有名から解き放たれる必要がある。ピアノやヴァイオリンが、もはや誰の名前とも結びついていないように。おそらくこれを最も実感しているのが、当の野坂恵子であり、吉村七重ではないか。彼女らは、二十絃箏から自分の固有名を引き離すために、あのすさまじい活動を行なってきたに違いないのである。なんと美しい逆説。

二十絃箏40周年を記念した本日の演奏会では、野坂や吉村のために書かれた作品が、多くの箏奏者によって演奏される。この波がさらに拡がっていった先に、二十絃箏の未来がおぼろげに姿をあらわすはずだ。

夏田昌和プロフィール



東京芸術大学大学院修了後、パリ国立高等音楽院を作曲の首席一等賞を得て卒業。作曲をジェラルド・グリゼイ、近藤譲、野田暉行、指揮をジャン・セバスティアン・ベロー、秋山和慶の各氏に師事。出光音楽賞、芥川作曲賞、Goffredo Petrassi 国際作曲コンクール審査員特別表彰、フンダサオ・オリエンテ国際指揮者コンクール第3位を始め、作曲と指揮の両分野での受賞や入選多数。

Ensemble Intercontemporain やフランス文化省、サントリー音楽財団など内外の諸団体から委嘱された作品は、パリやベルリン、アムステルダム、ニューヨーク、ザグレブ、ニース、大邱といった世界各地の音楽祭や演奏会にて紹介されている。また指揮者としては海外現代作品の紹介や邦人作品の初演を数多く手がけている。

国立音楽大学准教授、東京芸術大学、桐朋学園大学、日本大学芸術学部講師。

Ensemble Contemporary a 作曲家メンバー・指揮者。日本現代音楽協会副会長・理事。

松尾祐孝プロフィール



1959年生まれ。東京芸術大学作曲科を経て1984年同大学院修士課程修了。現音作曲新人賞入選(84)、日仏現代音楽作曲コンクール特別賞(85)、ACL青年作曲賞第1位(88)、ISCMワルシャワ大会国際審査入選(92)、村松賞(93)、別宮作曲賞(99)等受賞。作曲のみならず、指揮、企画・プロデュース等に多彩に活躍。特に日本現代音楽界の悲願であったISCM世界音楽祭の日本初開催にあたる〈ISCM世界音楽の日々2001横浜大会〉を実行委員長として総指揮した手腕は高く評価されている。また、[PHONOSPHERE I ～尺八と管弦楽の為に] (1993東京フィル委嘱)の東京フィル欧州楽旅での大成功以来、邦楽器作品も数多く手掛けている。現在、洗足学園音楽大学教授、東京芸術大学作曲科講師、日本現代音楽協会副会長(現代音楽教育プログラム研究部会長兼任)、等。「現代の日本音楽・第19集=松尾祐孝」(楽譜&CD/国立劇場編・春秋社刊)等、日米欧でCD等リリース。

● 賛助会員へのお誘い ●

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動の定着と発展を目指したく、ご協力をお願い申し上げます。

年間 個人会員10,000円(一口以上) 法人会員30,000円(一口以上)

【賛助会員】五十音順 法人

(株)全音楽譜出版社
(株)宮本卯之助商店
NPOTリトン・アーツ・ネットワーク

個人	青木隆	大関富	枝衣	佐藤	明	宮川
	青柳堯	太田	関田	四反	藤素	渡辺
	安達真	大塚	楓悦	野正	利幸	慶子
	新井克	川壁	子正	土井	士士	渡辺
	江西	後藤	陽子	水野	正見	治子
		緑			徳	

特定非営利活動法人

日本音楽集団

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302 TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
ホームページ <http://www.promusica.or.jp/> E-Mail office@promusica.or.jp